汲む

茨木のり子

作者

大正十五（一九二六）年～平成十八（二〇〇六）年。詩人。医者である父、宮崎洪、母、勝の長女として大阪に生まれた。本名三浦のり子。昭和十二（一九三七）年小学校五年生のとき、日中戦争が勃発。昭和十六年愛知県立西尾女学校三年生のとき、太平洋戦争が始まった。昭和十八年、帝国女子医学・薬学・理学専門学校（現、東邦大学）薬学部に入学する。昭和二十（一九四五）年八月十五日、学徒動員で就業していた世田谷区上馬の海軍療品廠で敗戦の放送を聞き、翌日、友人と東海道線を無賃乗車で、郷里の愛知県幡豆郡吉良町に戻った。昭和二十一年、読売新聞主催の第一回「戯曲」募集に応募し、「とほつみおやたち」が選外佳作となった。秋、薬学部を卒業し、薬剤師の資格を得たが、その資格を使用したことはない。戯曲の台詞の言葉に〈詩〉の欠如を感じ、本格的に詩を勉強する中で、金子光晴の詩に出会う。昭和二十四年に医師の三浦安信と結婚。昭和二十五年九月号の「詩学」に、投稿した「いさましい歌」が掲載された。昭和二十八年五月には同じ投稿者だった川崎洋らと「櫂」を創刊する。以後、水尾比呂志・谷川俊太郎・友竹辰・吉野弘・大岡信・中江俊夫・岸田衿子らが同人として参加した。昭和三十（一九五五）年第一詩集「対話」を刊行。「青春を戦争の渦中にあってすりへらさねばならなかった（しかもそれを痛切に自覚することさえなかった）若い女性の、くやしさと悔いと、それゆえの、未来への夢と願望とが、観念的な晦渋さのない言葉でさわやかにうたいあげられている。敗戦を契機にひらかれたはば広い社会意識と健康な批評精神が特徴」（エナジー小事典・「日本の詩人」）と評される。以後、「見えない配達夫」（昭和三十三年）、「鎮魂歌」（昭和四十年）、「人名詩集」（昭和四十六年）、「自分の感受性くらい」（昭和五十二年）、「寸志」（昭和五十七年）、「食卓に珈琲の匂い流れ」（平成四年）、「一本の茎の上に」（平成六年）、「倚りかからず」（平成十一年）を出版している。他に「詩のこころを読む」（昭和五十四年）、「ハングルへの旅」（昭和六十一年）などのエッセイや「韓国現代詩選」（平成二年）の注目すべき翻訳書も出している。

作者を解くカギ
「鑑賞」参照。

出典

本文は「茨木のり子詩集」（思潮社　昭和四十四）によった。「鎮魂歌」（昭和四十年一月）所収。初出は昭和三十七（一九六二）年一月「いずみ」第三号。「――Y・Y――」という献辞が付けられている。Y・Yは山本安英のイニシャル。この詩集につ

いては「あとがき」でひとを悼む歌が多かったため「鎮魂歌」と題したこと、妙な詩もまじり統一を欠いていることを断った上で、「日頃、一筋縄で締括られるような詩のかきかたはしたくない、かのシェクスピアのような多面性、百の魂を持ちたいという大それた願い」があったことを記している。

主題

人に対しても世の中に対しても初々しさが大切だ、という素敵な女の人の言葉が、人生の指針となり、とらえ方の原点ともなった。大人になった今もその言葉の意味を汲む。人生において決定的な言葉との出会いをこの詩はさりげなく提示している

構成

第一連　立ち居振る舞いの美しい発音の正確な素敵な女のひとの出会い
第二連　その女のひとがわたくしに言った言葉
第三連　その言葉を聞いたときのわたくしの衝撃
第四連　女のひとの言葉からわたくしが了解したこと。今もその意味を反芻していること

指導上の注意点

●二九四ページ

問 **「私の背のび」とは、どのようなことか。**

答 大人になることはすれっからしになることだと概念的に思い込んで、大人というものを安易に理解したつもりでいたこと。

補 「すれっからしになる」という「大人」についてのステレオタイプのイメージに従って、無理に大人びて振る舞おうとするのは、自意識の強い青春期にはありがちの態度であろう。それがどんなイメージかは、第四連の第一行「大人になっても」以下の内容から指摘できる。生徒自身の「大人」のイメージを問うことから始めてもよいであろう。

●二九五ページ

問 **なぜ、「私はどきんとした」のか。**

答 私が抱いていた大人に対する概念的な捉え方とは正反対の考えに衝撃を受けたから。

補 大人をすれっからしになることだという考えは、既に人を人とも思わなくなる傾向を示すものであることにも気付いたから。他者の「なにげない話」から決定的な人生の指針を得るというのは、むしろ聞き手の側の感受の力によるであろう。ひたむきに求める心があるから、それを重く受けとめ

語句の研究

●二九四ページ

2すれっからし　世間ずれして、厚かましく悪賢くなったこと。また、その人。すれからし、すりがらしともいう。

4立居振舞の美しい／発音の正確な／素敵な女のひと　山本安英のこと。山本安英は明治三十九（一九〇六）年、東京の神田に生まれた。築地小劇場の創立とともに研究生として入所、新劇草創期の数少ない女優として活躍した。戦前は新築地劇団に参加。戦後は木下順二の民話劇を上演し、特に昭和二十四（一九四九）年に初演した「夕鶴」のつうは、生涯の当たり役となり、「夕鶴」も戦後を代表する劇として評価された。昭和四十一（一九六六）年、山本安英の会を結成。朗読の研究にも力を注いだ。平成五（一九九三）年没。茨木のり子とは敗戦一、二年後に初めて出会ったという。茨木のり子の童話や詩、放送劇を朗読することで、交流があった。

7私の背のび　無理に高く見せようとする動作。大人びた考えをしようとしていたことを言う。

9初々しさが大切なの　「初々しさ」とは、初心の状態で、物慣れず新鮮な感覚をすべてのものに向けている状態。

●二九五ページ

1人を人とも思わなくなったとき　傲岸不遜に人を物のように見下して、相手の気持ちを考慮に入れなくなったとき。自分は偉いのだという思い上がった状態。

2堕落　精神的な向上心を失い、落ちぶれること。仏教では道心を失い、悪道に落ちることを言う。

3隠そうとしても　隠せなくなった人　表面的にとりつくろっても、堕落した思いがおのずから言動に現れてしまうこと。

6どぎまぎ　不意打ちを食ったり、威圧されたりして、うろたえ慌てる様。

7ぎごちない挨拶　緊張のあまり挨拶の言葉がうまく出てこず、うろたえている様子。「ぎごちない」は、動作がぎくしゃくしてなめらかでない様。

7赤くなる　緊張のあまり顔が赤くなる

8失語症　発声器官や聴覚に障害がないにもかかわらず、言葉の使用や理解ができない病的状態を言うが、ここでは緊張のあまり言葉が出てこない状態になること。

ることができた。この詩は作者の自己確認の歌ということができよう。

問 **「それらを鍛える必要は少しもなかったのだな」という「それら」とは、どういうことを指しているか。**

答 ぎごちない挨拶をしたり、醜く赤くなったり、言葉がスムーズにでないでどぎまぎすること。そして子供の悪態にさえ傷つく敏感な感受性をいう。

補 「私」がこれまで恥じていた未熟さの具体例を列挙している箇所のため、生徒自身の似たような認識・経験について問うきっかけにもなるだろう。

●二九六ページ

問 **◉「震える弱いアンテナが隠されている」とは、どういうことか。**

答 いい仕事の核には分かったつもりになって臨むのではなく、常に初々しい敏感な感性をもって物事に取り組む姿勢があるということ。

補 第二連で、初々しさを失って堕ちてゆく人間の多さが語られていることから、この「アンテナ」は気をつけていないと作動しなくなる貴重なものでもあるだろう。

9悪態　悪口。悪たれ口。

10生牡蠣のような感受性　牡蠣殻から取り出された柔らかな傷つきやすい剥き身の例示。

12年老いても咲きたての薔薇　年老いた薔薇の木にも咲き出す花は常に生まれたばかりの初々しさがあるということ。

●二九六ページ

3震える弱いアンテナ　「アンテナ」は無線通信、携帯電話、ラジオ、テレビ等で電磁波を送信したり受信したりする装置。些細なものでも繊細に感じ取る感性の裏づけがあるということ。

鑑賞

詩「汲む」は、人生においてその後の方向を左右するような人との出会い、言葉との出会いが書かれている。

詩「汲む」において、茨木のり子から献辞を受けた山本安英は、「汲む」という詩にどのような気持ちを抱いているかを、「茨木のり子さんのこと」という文に記している。

あの時期（注、敗戦後一二年経った頃）は、演劇のいちばん本質的な問題が、みんなで論じ合われていて、俳優として、歴史や科学の勉強の第一歩から、人間の再創造までをつかみとろうと夢中になっていたのだと思います。茨木さんの『汲む』という詩には、「Y・Yに―」という副題がついていて、そのころ私が演劇の話をしながら、ふっと口にしたことばを詩のなかに定着させてくださったのです。私のつたない話を、茨木さんはことごとく、人間の生き方の問題として深く受けとめてくださったということを感謝したい気持ちなのです。

また、「端麗というのでしょうか、ひたむきに求めるこころが表情にあらわれていて、そういう深いところからくる美しさ」を山本は茨木のり子に見たともいう。

一方、茨木のり子のほうでも、山本安英について「新劇女優の山本安英さんから一度会いたいというお手紙を頂き、まだ『夕鶴』が生まれる前の山本さんにお目にかかり、それからずっとおつきあいが続いているが『女の生きかた』の一番大切なところを、私は山本さんから学び吸収しようとしてきたような気がする。」（「はたちが敗戦」）と書いている。

親愛の情あふれる交流と言ってよいだろうが、むろんそこには安易な妥協はなかったと思われる。次の山本安英の言葉がそのことを示している。

茨木さんはよく、私を、生きる指針にしていると言われる。茨木さんらしい、やさしい、ひとつの励ましのことばだと思っていますが、ほんとうにそんなふうに思ってくださっていたら、それはこわいことです。もし私がまちがったとしたら、いちばん怒るのは彼女でしょう。こわさというよりも刺戟というか、そういう関係をつきつけてくれている。

茨木のり子さんは、あまりにも、ちゃんと生きていこうとする人である、ということを私はどうしても言いたくなってしまうのです。

「汲む」に出てくる山本安英の言葉は、茨木のり子に対して述べられたものではなかったという。だが、その言葉を茨木は「わたしは自分への大事な言葉のように受けとめたんです」という。茨木のり子自身が、このような言葉を求めていたのだ、とも言えよう。

舞台女優の山本安英は「ある時、ある舞台で咲かせた花は、瞬間に消え去って、何ひとつ跡をとどめるものがない。いつも〝これから〟を求めていくより仕方がありません。」と演技するものの覚悟を語っている。その〝これから〟を求めていく姿勢は、「初々しさが大切なの」という言葉にストレートにつながっている。「Y・Y」女の「なにげない話」から少女時代の作者が汲んで自分に課しているのは、「震える弱いアンテナ」を失わずに「いい仕事」をすること。「柔らかく」そして「外にむかってひら

かれる」ことである。「柔らか」いからこそ〝これから〟を求めて「外にむかってひらかれる」のである。

「Y・Y」のモデルである山本安英が舞台俳優であったことを考えると、「立居振舞の美しい」「発音の正確な」とは、まずは日常的に訓練を積んでいるゆえの所作の美しさ、発声の正しさを指すものと理解できる。詩編のみを鑑賞する場合、やや誤解を招きかねない表現ではあるが、表層的な礼儀作法や、特定の言語の運用能力をもって「素敵な女のひと」と述べられているわけではないことには注意しておきたい。これらの表現が、ある特定の文化的コードにおいて洗練されていることを指すと解釈してしまうと、この女性は世慣れなさや初々しさとは正反対のものを体現していることになり、全体の趣旨にも矛盾が生じる。型通りの品行方正さではなく、内面の謙虚さや周囲への礼節が滲み出るようなあり方として捉えたい。

参考文献

「茨木のり子詩集　現代詩文庫20」　思潮社　昭和四十四
「現代の詩と詩人」　中村稔他編　有斐閣　昭和四十九
「現代の詩人7　茨木のり子」　川崎洋鑑賞　中央公論社　昭和五十八
「月刊国語教育」　心にふれる現代詩　平成四年一月号　東京法令出版
「国文学」現代詩を読むための研究事典　平成四年三月号　学燈社
「増補　茨木のり子〈花神ブックス1〉」　花神社　平成八
「日本名詩集成」　学燈社　平成八
「新研究資料現代日本文学7　詩」　明治書院　平成十二